20.9.20. 創立 92 周年記念礼拝(秋季召天者記念式)

「私たちの魂の牧者」

皆さん、おはようございます。9 月も後半に入りまして、朝晩はようやく過ごしやすくなって参りました。世間では昨日から 4 連休ということで、東京在住の方々も含めてゴートゥーキャンペーンを利用した観光地や行楽地へ出かけられる人々も多いのではと思いますが、長引くコロナ禍にあって感染の再拡大の機会とならぬよう、このまま緩やかに終息に向かうよう祈るばかりです。また、先週には私たちの国の新たなリーダーが選ばれ、新内閣がスタートしましたが、コロナや経済対策をはじめとして、外交問題 etc 山積する問題を担う為政者たちが、主の御旨に適った道を進むことが出来ますように祈りたいと思います。

さて、本日与えられました聖書の御言葉は、今日の日毎の糧の聖書箇所であるペトロの手紙第一 2 章 11 節から 25 節までの御言葉となります。はじめに本書の内容に入る前に、書かれた背景や概観について押さえておきたいと思います。このペトロの手紙第一は、紀元 90 年頃、恐怖政治で知られたドミティアヌス帝の時代、ローマから小アジア(現在のトルコ付近)にある迫害に苦しむ諸教会に宛てて書かれたものと言われています。著者に関しては、そのタイトルの通り主イエスの一番弟子であったペトロであると言いたい所でありますが、本書の内容やギリシャ語の言い回し etc が、ガリラヤの漁師であったペトロには似つかわしくないとの理由から、ペトロの名を借りて執筆されたものと考えられています。古くは使徒パウロの協力者であったシルワノが、ペトロの秘書として手助けをして記したのではないかとの説もありますが、おそらくペトロを師と仰ぐ教会の指導者が、ペトロの名によって書き記したのではないかと思われます。執筆の事情に関しては、先に触れたように、小アジア全土に及ぶ国家規模のキリスト教弾圧の下、迫害や苦難の試練の中にあるクリスチャンたちに対して、キリストにある望みと慰め、励ましを与えるために書き送ったものであると言えます。

著者は 1 章の冒頭において、「恵みと平和が、あなたがたにますます豊かに与えられるように。」(2 節)と、初めの挨拶を述べた後、キリストの復活を通して、新たな命と希望を与えて下さった主に感謝を表し、真理を受け入れて魂を清め、互いに愛し合うようにとの勧めの言葉が語られていました。(22 節)。続く 2 章の前半部分では、御言葉を慕い求める生活と共に、神の民としての新たな生活について書かれており、暗闇の中より光の中へと招き入れられた者として、主を証しする生活が勧められていました。本日の聖書箇所である 2 章１１節からは、神の民としてのキリスト者に対する実際的な勧めについて教えられており、１３節以降１７節までは、神様を信じる信仰者とその国家との関係性について述べられています。著者は先ず「あなたがたは、この世の旅人であり寄留者であるから、たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい。」(11 節)と語っており、キリストを主と告白するキリスト者はこの世にあって、この世のものではないと告げています。真の神を信じる私たちにとって、この世は永住すべき場所ではなく、一時的に身を寄せている場所に過ぎないということを教えています。私たちの国籍は天にあるのだから、この世の一時的、かつ刹那的な快楽に身を委ね、執着することなく、異教社会にあって、たとい誹謗中傷されるようなことがあっても、めげずに主を証しし続けようではないかと勧めています。

第 5 代ローマ皇帝であったネロの時代、ローマの大火の際に、その罪の濡れ衣を何の罪もないクリスチャンたちに着せたことは、よく知られた話でありますが、ドミティアヌス帝の時代においても神を信じる者たちが「悪人呼ばわり」(12 節)されていたというのは、彼らが厳しい迫害の下におかれていた様子を垣間見ることが出来ます。13 節においては、この世の寄留者であり、旅人である私たちに対して、「主のために、すべて人間が立てた制度に従いなさい。」という事が言われています。それも当時の最高権力者であった皇帝であろうと、皇帝によって派遣された総督であろうと服従するようにと、書かれています。現代に生きる私たちの大半は、おそらくこの聖句に違和感や抵抗を感じるのではないかと思いますが、著者の意図する所は、私たち神を信じ

る者が善悪の分別もなく、ただ言われるがままに国家権力や既存の権威に盲従せよと、言っている訳では決してありません。言い換えるならば、「人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。」ということになります。著者はこの所で、国家や社会のために私たちが個人的な事柄を犠牲にせよと言っているのではなく、私たちの贖い主であるキリストこそ王の王であると信ずるが故に、この地上の権威に対しても従うようにと、告げているのであります。この所に書かれている「すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏れ、皇帝を敬いなさい。」(17 節)との聖句を理解する鍵は、主イエスが教えられた「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。」(マルコ伝 12 章 17 節)との、あの御言葉の中にあるように思います。

何とかして主イエスを逮捕する口実をつかもうと、ユダヤの国の指導者たちが送り込んだファリサイ派やヘロデ党の人間たちは、虎視眈々とその機会をねらい、見せかけのお世辞を持って主イエスに話しかけ、次のような質問をしました。「…ところで、私たちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないのでしょうか。」と、彼らは主イエスを罠に陥れるために、そのような問いを投げかけたのでありました。何故、この質問が主イエスを陥れるための謀略であったのかと言いますと、どっちに転んだとしても、公の場で返答しなければならないが故に、不利な立場に立たされていたからであります。もし主イエスが皇帝に税金を納めることは法律に適っていると答えたならば、重税に苦しんでいた民衆たちから反発を食らうことになります。一方で、皇帝への納税は律法に適ってはいないと答えるならば、直ちにそのことがローマ総督に耳に入り、彼らの思惑通り主イエスはローマに対する反逆者との烙印を押されることになり、総督ピラトに主イエスの処刑を宣告させる口実を与えることになります。この崖っぷちに立たされた危機的な状況において、主イエスは頓智にたけた一休さんではありませんが、神の智慧によって機知に富んだ問いを彼らに投げかけるのであります。「では、あなたの持っている銀貨を見せなさい。ここに刻まれているのは誰の肖像であり、誰の名前であるのか？」彼らがそろって「皇帝(カイザル)のものです」と答えるや、主イエスは「ならば、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。」と言われました。公衆の面前において、主イエスのその言葉に大変驚いた論敵たちは、その後、返す言葉もありませんでした。主イエスがこの地上におられた 30 数年という期間、人としてユダヤ社会の制度に従われ、納税に従われたということは、神様が無秩序な御方ではないということを、私たちに教えてくれていると言えます。暴君と呼ばれるような、勝手気ままに振る舞う横暴な君主であったとしても、その皇帝に服従し、皇帝を敬うようにというのは、理不尽極まりない事であると言わざるを得ませんが、「善を行うことによって、愚かな人々の無知な発言を封じるのは、神の御旨なのである。」(15 節)と述べられています。さらには、キリストの福音によって、悪しき思いと力から解放された自由人に相応しい生き方をするようにとも勧められています。つまり、嫌いな君主の前で、表面的に仕えるふりをするというのではなく、真心から「すべての人を敬い、兄弟たちを愛し、神を畏れ、王を尊びなさい。」(17 節)と教えられているのであります。

続く 18 節以降最後の 25 節までは、神を信じる召使いたちへの勧めの言葉が書かれています。この「召し使いたち」というのは、以前の口語訳聖書では、「僕たる者よ」と訳されており、当時の異教世界において奴隷の立場にあったキリスト者に向けて語られているメッセージであると言えます。以前にも少し触れていますが、当時の古代ローマ世界には約 6 千万人の奴隷の立場にある人々がいたとも言われており、その中には医師や教師など、教養や学識ある人々も含まれていたと言われています。おそらくこの所で言及されている「召し使いたち」というのは、家僕のような各家庭において主人から雇われて家の雑事をしていた人々であると考えられます。18 節で言われていますように、家の主人と言っても、善良で心の広い主人もいれば、思いやりの心など一切ない、無慈悲な主人もいたと言うのであります。しかしながら、次の 19 節には、「もし誰かが、その無慈悲な主人から不当な苦しみを受けたとしても、神を仰いでその苦痛を耐え忍ぶなら、それは神に喜ばれることである。」と書かれており、現代に生きる私たちには、正直、受け入れがたい言葉であると言えます。

さらに著者は、「…善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。」(20節)とまで告げています。召し使いが正しいことをしたばかりに、かえって苦しみを受け、それをじっと耐え忍ぶ場合には、神に喜んでいただけますというのは、中々理解に苦しむというのが正直な所でありますが、そのような理不尽な仕打ちを家の主人から受けたとしても、主人に服従するようにと言われています。

おそらく著者の語るそういった状況が、日常生活の中で決して珍しくはない光景であったのだと思われますが、著者は不条理な環境の只中にあった召し使いたちを励まし、勇気づけるために、不当な苦しみの極限を耐え抜かれた主の十字架の出来事に言及しています。無実の罪によって十字架刑にまで処せられた主イエスは、「ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。」(23節)と、一切を天の御父に委ねられた様子について語っています。そして、この不当に扱われた者の模範となられたキリストの十字架の出来事が、私たちの罪を赦すための贖いの死であったことを告げています。

また、旧約のイザヤ書53章に描かれた「苦難の僕」としてこの世に来られた主イエスが受けたその「打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされたのです。」(24節)と述べられています。横暴な主人から鞭打たれた経験のある召使いにとって、この言葉は心底から励まされるメッセージであったに違いありません。かつて、あなたがたは迷子の羊たちのように道を踏み外し、当て所もなく彷徨い続ける者であったが、今はどのような外敵の攻撃からも私たちを守って下さる真の羊飼い、私たちの魂の牧者である御方の許に帰ったのですと、語られています。

今週９月２３日(水)には、この大阪天王寺区大道の地にキリストの福音の種が蒔かれて９２年目を迎えようとしていますが、長引くコロナ禍という、かつて経験したことのない苦境に立たされている私たちでありますが、私たちの魂の牧者であり、監督者である主イエスにお委ねして、共にこの難局を乗り越えて行きたいと願うものであります。新たな政局の転換期にあることを覚えますが、私たちの生きるこの国と為政者たちを覚えて共に祈り、世界の平和と安寧な社会生活が全ての人にもたらされますように、祈りを捧げようではありませんか。